

博士論文（要約）

論文題目 『日本書紀』の「歴史」と朝鮮  
—世界構造と世界理念—

氏 名 キムジョンヒー  
金静希

本論文の一部はすでに学術雑誌に掲載済みであり、契約内容により、インターネット公表に対する許諾が得られていない。また、これから論文の一部が雑誌掲載の形で刊行される予定なので、ここには掲載の予定のない目次と序論、結論、参考文献を載せることとする。

・掲載済み

1. 平成 24 年 6 月「『古事記』『日本書紀』における「韓」—テキスト論的な観点から—」『比較日本学』26 号、99～128 頁、漢陽大学校学内志  
(目次の第一章と類似)
2. 平成 25 年 5 月「『日本書紀』の中の任那—任那という国号をめぐって—」『日本学報』5 月号、191～200 頁、日本学会学会誌  
(目次の第二章の第二節と類似)
3. 平成 26 年 2 月「『古事記』の世界観がつくるアメのヒボコ物語—『日本書紀』との比較を通して—」『日本学報』2 月号、325～336 頁、日本学会学会誌 (目次の第三章の第一節と類似)

・掲載予定

1. 第二章の三節、第二章の四節 (2015 年以内に雑誌掲載予定 (『日本学報』))
2. 第三章の二節 (2015 年以内に雑誌掲載予定 (『日本学報』))

# 目次

|                            |             |
|----------------------------|-------------|
| 序章                         | 1 頁         |
| 1. はじめに                    | 1 頁         |
| ・古代日朝関係史に関する従来の研究方法論批判     | 1 頁         |
| ・教科書問題をめぐって                | 4 頁         |
| 2. 本論文の立場と問題設定             | 6 頁         |
| 3. 論文の構成                   | 8 頁         |
| <b>第一章「三韓」一天皇の世界の広がり</b>   | <b>11 頁</b> |
| 第一節 中国正史や古代金石文における「韓」と「三韓」 | 12 頁        |
| 1) 「韓」の起源と発展               | 12 頁        |
| 2) 「三韓」について                | 15 頁        |
| 第二節 『古事記』における「韓」           | 20 頁        |
| 1) 神代の「韓」                  | 20 頁        |
| 2) 文物の渡来を表象する「韓」           | 23 頁        |
| 第三節 『日本書紀』における「韓」と「三韓」     | 26 頁        |
| 1) 否定的イメージを持つ「韓」           | 26 頁        |
| 2) 「内官家」としての「三韓」(百済・新羅・任那) | 27 頁        |
| <b>第二章「任那」と「任那日本府」</b>     | <b>32 頁</b> |
| 第一節 中国正史や韓国の史料に表れた加羅と任那    | 32 頁        |
| 1) 中国正史における加羅と任那           | 32 頁        |
| (1) 加羅                     | 32 頁        |
| (2) 任那                     | 34 頁        |
| 2) 韓国の史料における任那             | 38 頁        |
| 第二節 『日本書紀』における「任那」         | 41 頁        |
| 1) 任那の国号                   | 41 頁        |
| (1) 諸説                     | 41 頁        |
| (2) 天皇の名を負うこと—ミヤケ・名代       | 42 頁        |
| 2) 任那の調                    | 45 頁        |

|                            |             |
|----------------------------|-------------|
| (1) 諸説                     | 45 頁        |
| (2) 任那の調の語り方               | 46 頁        |
| 3) 附庸—皇帝の附庸・天皇の附庸          | 48 頁        |
| <br>                       |             |
| 第三節 『日本書紀』における「任那日本府」      | 51 頁        |
| 1) 問題の所在                   | 51 頁        |
| (1) 従來說                    | 51 頁        |
| (2) テキスト論の立場から             | 52 頁        |
| 2) 天府の国—任那                 | 53 頁        |
| 3) 軍部としての任那日本府             | 55 頁        |
| <br>                       |             |
| 第四節 任那・任那日本府と朝鮮諸国          | 58 頁        |
| 1) 三絞の綱—日本・百濟・任那           | 58 頁        |
| 2) 任那日本府と朝鮮諸国              | 61 頁        |
| <br>                       |             |
| <b>第三章 ヒボコ物語—世界理念のあらわれ</b> | <b>64 頁</b> |
| <br>                       |             |
| 第一節 『古事記』におけるヒボコ物語         | 64 頁        |
| 1) ヒボコ物語の位置                | 64 頁        |
| (1) 問題の所在                  | 64 頁        |
| (2) ヒボコ物語と中巻を結ぶ応神朝         | 67 頁        |
| 2) 婚姻物語                    | 68 頁        |
| 3) 『古事記』における世界認識           | 70 頁        |
| (1) 中心と周縁                  | 70 頁        |
| (2) 『古事記』の「天下」             | 72 頁        |
| <br>                       |             |
| 第二節 『日本書紀』におけるヒボコ物語        | 77 頁        |
| 1) ヒボコの子孫                  | 77 頁        |
| (1) 問題の所在                  | 77 頁        |
| (2) タジマモリと常世               | 78 頁        |
| (3) 神宝物語                   | 80 頁        |
| 2) 「化」をめぐって                | 82 頁        |
| (1) ヒボコの「来帰・化帰」            | 82 頁        |
| (2) 『日本書紀』における世界統合原理—「化」   | 87 頁        |
| <br>                       |             |
| <b>終章</b>                  | <b>90 頁</b> |

## \* 凡例

- ・『古事記』と『日本書紀』は表題及び各章の題目を除いて『記』『紀』と略称する。
- ・テキストの巻数や論文の号数を示す場合、もとのテキストが示すもの（漢字かアラビア数字）にしたがって表記する。
- ・漢籍や金石文など中韓のテキストは原文と現代日本語訳を併記し、和文は読み下し文を載せる。
- ・引用文が一書か分注である場合< >で表示する。
- ・韓国での出版物の場合、注では日本語で訳し、韓)と記して、韓国での出版物であることを示す。文末の参考文献では韓国語と日本語訳を併記する。
- ・参考文献は中国・韓国・日本という出版国別に並べたあと、一次資料（原文と注釈書）と二次資料（著書や雑誌所収論文）に分け、出版年度順に並べる。

## 序章

### 1. はじめに

#### ・古代日朝関係史に関する従来の研究方法論批判

古代日朝関係史を論ずる際に、日本のテキストでは『古事記』『日本書紀』<sup>1</sup>が、韓国のテキストでは好太王碑文（広開土王碑文）と『三国史記』『三国遺事』<sup>2</sup>がもっとも多く用いられているが、それぞれの史書が異なる歴史を語っているため、これらをめぐって様々な論議が繰り広げられている。

例えば、『記』『紀』では神功皇后が新羅を征伐し、特に、『紀』では高麗・百済・新羅・任那を日本に朝貢する国として示し、任那に任那日本府をおいたと記す。それに対し、韓国の史料ではこれらの内容を語る史料はなく、むしろ侵入してきた倭を高句麗・新羅が撃破したという記事が好太王碑文や『三国史記』『三国遺事』に数多く見られている。これに対して、韓国では一般に『記』『紀』の新羅征伐記事や任那日本府記事を「歪曲」といい、『記』『紀』における倭撃破記事の不在を「隠蔽」と述べる<sup>3</sup>。

例えば、次の如くである。

a-1. 是に、其の国王畏み惶りて奏して言ひしく、「今より以後、天皇の命の随に、御馬甘と為て、年毎に、船を双べて、船腹を乾さず、柁楫を乾さず、天地と共に、退むこと無く仕奉らむ」といひき。故、是を以て、新羅国は、御馬甘と定め、百済国は、渡の屯家と定めき。『記』（仲哀、247頁）

a-2. 爰に新羅の王波沙寐錦、即ち微叱己知波珍干岐を以て質として、（中略）官軍に従はしむ。（中略）是に、高麗・百済、二の国の王、新羅の、凶籍を収めて日本国に降りぬと聞きて、密に其の軍勢を伺はしむ。（中略）  
「今より以後は、永く西蕃と称ひつつ、朝貢絶たじ」とまうす。故、因りて

<sup>1</sup> 山口佳紀、神野志隆光『新編日本古典文学全集1 古事記』小学館(1997)  
坂本太郎、家永三郎 他『日本古典文学大系 日本書紀(上・下)』岩波書(1965, 1967)以下、『古事記』『日本書紀』は『記』『紀』と略称し、頁を記す場合、上記のテキストの頁を用いる。

<sup>2</sup> 韓) 姜仁求、金杜珍ほか『完訳三国遺事(I~V)』韓国精神文化研究院(2002~2003) 韓) 鄭求福、蘆重国ほか『訳註三国史記(1~5)』韓国精神文化研究院(1997~1998) 本文は上記を用い、以下の刊行物を参照にする。

韓) 鄭求福、蘆重国ほか『改訂増補訳註三国史記(1~5)』韓国中央研究院(2011~2012)

佐伯有清『三国史記倭人伝』岩波書店(1988)

金思燁『完訳三国遺事』明石書店(1997)

金思燁『完訳三国史記』明石書店(1997)

<sup>3</sup> 朴時亨『広開土王陵碑』そしえて(1985) 105頁。

内官家屯倉を定む。是所謂三韓なり。皇后、新羅より還りたまふ。

『紀』（仲哀九年十月、上巻、338～340頁）

b. 任那国、蘇那曷叱知を遣して、朝貢らしむ。任那は、筑紫国を去ること二千余理。北、海を阻てて鶏林の西南に在り。

『紀』（崇神六十五年七月、上巻、253～254頁）

c. 是に新羅の王、（中略）乃ち人を任那の王のもとに使りて曰はく、「高麗の王、我が国を征伐つ。（中略）伏して救を日本府の行軍元帥等<sup>4</sup>に請ひまつ」といふ。是に由りて、任那の王、膳臣斑鳩（中略）・吉備臣小梨・難波吉士赤目子を勧めて、往きて新羅を救はしむ。（中略）膳臣等、新羅に謂りて曰はく、「汝、至りて弱きを以て、至りて強きに当れり。官軍救はざらましかば、必ず乘れなまし。人の地に成らむこと、此の役に殆なり。今より以後、豈天朝に背きたてまつらむや」といふ。

『紀』（雄略八年二月、上巻、478～479頁）

現在、韓国における『紀』の代表的注釈書である『日本書紀韓国関係記事研究（Ⅰ）』<sup>5</sup>では、これらの記事に次のような注をつけている。

#### a についての注

神功皇后の新羅征討に関しては次のような幾つかの観点がある。一つ目は神功皇后の新羅征討を歴史的事実としてみることである。（中略）二つ目は虚構の話として見なす観点である。（中略）三つ目はこの問題を象徴的儀礼または神話的側面から迫る方法である。（中略）神功皇后の新羅征討に関するいくつかの観点について述べたが、最初の観点は倭の韓半島南部支配説が崩壊された現在の時点で再論する必要のないものである。

#### b についての注

金鉉球は『日本書紀』の作為・潤色した部分を取除き、関連史料を検討した結果、実際、（倭と）韓半島との関係は百済を中心に展開されたことを論証した。なので、最初の天皇（御肇国天皇）である崇神天皇代に（任那が）初めて朝貢してきたという内容は『日本書紀』編者の叙述態度を反映したもので、歴史的

<sup>4</sup> 『日本書紀通証』では「府」と「行軍元帥」について次のように注をつけている。

「風俗通に府は公卿牧守通徳の聚る所なり。唐はじめ州郡をもって府となす。」

「職原鈔に曰く、將軍府を建てるの初め此に在り。」つまり、「府」が唐の公卿などの官吏の集まる所、行政区画の一つである州郡、將軍府だということになる）

谷川士清『日本書紀通証』臨川書店（1978）1264頁。

<sup>5</sup> 韓）金鉉球、禹在柄、朴賢淑、李在碩『日本書紀韓国関係記事研究（Ⅰ）』一支社（2002）23頁、67頁、78頁、251頁。

な事実を反映したとは思えない。

#### c についての注

これが『日本書紀』における「日本府」の最初の用例であるが、それに属しているという「行軍元帥」もここにだけ見える独特な表現である。ところで、

「日本」は一般的に七世紀以後用いられた用語であり、五世紀段階では存在しなかったというのは明らかである。要するに、「日本府」という表記は五世紀には不可能な表現なので、加筆された部分だということである。また、この記事以後、欽明紀に至るまで「日本府」という表現が見えないということからしても、「日本府行軍元帥」関連記事は孤立した性格の史料だといえる。

(中略) 一般的に韓国学界では、これらの記事について『日本書紀』編纂段階で韓半島系の移住民出身の人々がもっていた韓半島関連伝承記録に律令的史筆を加え、新羅服属に関する内容を挿入し、ここに「日本府行軍元帥」という実在しなかった存在を結合してつくったと理解している。

要するに、これらの記事を虚構だとするのである。このような研究方法が朝鮮記事研究の一般的で支配的な研究傾向とっていいと思われる。このような研究方法をとるこの著書が古代研究史の第一線で活躍する研究者たちの出版物である以上、後学たちに与える影響は大きい。

ここでは、『記』『紀』の内容の相違を比較はしているものの、単なる記事の引用だけで、なぜ異なるのかテキストそれぞれの全体像から把握しようとする試みはしていない。そのためか、任那と任那日本府の記事が『記』にはなく、『紀』にだけあるのも指摘せず、それが何を意味するのか説明することもない。

また、神功皇后の新羅征伐については、考古学的成果などによってこの虚構性がすでに立証されたことだと見なしている。そして、至るところで『三国史記』『三国遺事』の記事と『紀』の記事とを比較し、例えば、新羅からの人質である「微叱己知波珍干岐」（仲哀九年（200））を『三国史記』の末斯欣（実聖王元年（402））、『三国遺事』の美海（奈勿王三十六年（391））と同一人物と見なしている。しかし、人質になった年度も、彼らを救出する人の名前も、救出する内容もそれぞれ異なることについては触れない。

根本的な問題は、史実性に拘り、もっぱら『紀』の虚構性を論じて、全体のテキストの内容を無視しているということである。これは民族感情と結びつくものだった。金東秀氏は「古事記」に表れた歴史歪曲に関する考察<sup>6</sup>で、神功皇后の新羅征伐記事や新羅・百済の朝貢記事を挙げて、『記』が歪曲捏造されたテキストであるといいつつ、結論を次のような言葉で締めくくっている。

新羅国王の宮殿の前に杖を立て、占有権を表示したというありえない荒唐無稽な話をし、韓半島特に新羅を見下している。（中略）自分たちの歴史を正

<sup>6</sup> 韓) 金東秀「古事記」に表れた歴史歪曲に関する考察『同日語文研究（第2輯）』同徳女子大学校（1987）



しく正直に認識しない民族は他民族に接する場合、卑怯な態度をとることになり、これは誠実な民族とはいえない。苦難に満ちた過去であれ、光栄の歴史であれすべて否定できない歴史であり、これを基に発展していく民族こそ虚偽に走らず、仰ぎ見られる民族国家として永遠の繁栄を誇るだろう。

さすがに最近はこのように、あからさまに民族感情を表に出す学術論文は少なくなっているものの、上記で例に挙げた注釈書などのように、前後の説明なく、『紀』の虚構・歪曲を指摘する場合が多々ある。しかも、日本の地名に朝鮮の国名が多く見られることなどから、日本列島の国々を建てたのが古代朝鮮人であるとする、1960年代の金錫亨の分国論（任那は朝鮮南部の勢力が北九州に建てた国の一つ）<sup>7</sup>と類似した論を展開する場合もある<sup>8</sup>。

つまり、現在、韓国における古代日朝関係史研究は史実追求という旗だけを掲げて、テキスト抜きで感情論が展開されているといわざるをえない。そのためか、テキスト引用をしても断片的引用にすぎず、テキスト全体が言おうとしていることを見ようとはしない。無造作に『紀』『三国史記』『三国遺事』を同じ線上に並べて比較し、それぞれ異なる世界を語るテキストを見ようとはしない。「自」の眼差しで「他」を評価し、「史実」として決め付けてしまうのである。

#### ・教科書問題をめぐって

このような従来の研究方法で造られた「歴史」教育は、果たして人々にどのような歴史認識を持たせたのだろうか。2001年、扶桑社の『新しい歴史教科書』をめぐる日韓の紛争は、今までの歴史界の問題が何だったのか如実に示してくれる。

まず、扶桑社を支持する高森明勅氏の話挙げよう。彼は韓国政府の教科書修正要求に対して「任那日本府説」「三国の朝貢説」という項目を挙げて次のような批判をする。

韓国政府が問題にした箇所は次の通り。

「四世紀後半、大和朝廷は海を渡って朝鮮に出兵した。大和朝廷は、半島南部の任那（加羅）という地に拠点築いたと考えられる。」

これのどこが間違っているというのか。（中略）現に広開土王碑文にも、高句麗軍の追撃を受けて日本の軍勢が「任那加羅」に退却したことが出てくる。中国史料の『宋書』倭国伝に、倭王済や武が宋から「任那加羅」など半島南部の軍事的支配権を示す称号が与えられた事実が記録されているのも注目に値する。

（任那日本府説）

「五七〇年以降になると、東アジア一帯に、それまでの諸国の動きからは考えられない新しい事態が生じた。高句麗が突然、大和朝廷に接近し、引き続いて、新羅と百済が日本に朝貢した。三国がたがいに牽制しあった結果だった」

<sup>7</sup> 金錫亨著・朝鮮史研究会訳『古代朝日関係史 大和政権と任那』勁草書房（1969）

<sup>8</sup> 韓）崔在錫『古代韓日関係と日本書紀』一志社（2001）16頁。

これにも韓国政府は猛然とかみつてきた。「『日本書紀』だけを根拠とした記述」ときめつけ、「六世紀以降の三国が日本より政治・文化的優位にあるというのが韓日の学会の通説」と言い張る。ところが中国史料の『隋書』倭国伝にはこうある。

「新羅・百濟は、みな倭をもって大国にして、珍物多しとなし、ならびにこれを敬仰して、つねに使を通じて往来す」  
(三国朝貢説)<sup>9</sup>。

高森明勅氏は好太王碑文(広開土王碑文)の例や『宋書』『隋書』の例を挙げ、倭が朝鮮南部(新羅・百濟・任那)に対して政治的・軍事的優位にあったかのような叙述をし、三国朝貢説という題目をつけて、まるで高句麗までそのような日朝関係に組み込まれているような叙述をしている。それが『紀』の語る日朝関係を念頭においた発想であることは推測するに難くない。

それでは、韓国の教科書ではこれらの部分ほどどのように記述されているだろうか。日本で韓国教科書の翻訳本として出版されている『入門韓国の歴史【新装版】—国定韓国中学校国史教科書』<sup>10</sup>では『隋書』『宋書』の例もなければ、三国の朝貢記事も任那の話もない。あるのは強盛な高句麗が倭を撃破したという記事と、三国と伽耶の先進文化が日本に伝わったという記事だけである。

広開土大王は領土を大きく広げ、高句麗の全盛時代を開いた。(中略)5万の兵を新羅に送り、侵入した倭軍を洛東江流域で撃退した。(中略)  
百濟は日本と政治的に緊密な関係を維持したので、三国中、日本文化に一番大きな影響を与えた。(中略)高句麗もたくさんの文化を日本に伝えてあげた。  
(中略)新羅は船をつくる技術、ならびに堤防と城郭を築く技術を、伽耶は土器をつくる技術を日本に伝えてあげた。このように三国は発達した文化を日本に伝えてあげ、日本の古代の飛鳥文化を生み出すうえで大きく貢献した。

現在、韓国では教科書検定を通過した歴史教科書が中学校用は「歴史」、高校用は「韓国史」という名前で約十種類(志学社、教学社、非情教育、天才教科書、天才教育、金星出版社、杜山東亜、大橋、未来アンド、三和出版社)出版されているが、これらの2013年度版を見ても、上記の1998年度版と表現は違うものの、内容的にはほぼ一致しているといえる。筆者の学生時代を思い起こしても、高句麗(遼東まで領土拡張を達成した広開土大王)と古代の倭(我々の先進文化を伝えられた国)は我々の歴史の自負心の象徴として強調され、教育されたのを覚えている。

『宋書』『隋書』『紀』を引用しない理由は、これらの記事を史実として認めないためでもあるだろうが、それを言うとなりどころが悪くなるからでもあるだろう。例えば、『宋

<sup>9</sup> 高森明勅「韓国政府「修正要求」のお粗末」『「まとめて反論」—『新しい歴史教科書』の思想』扶桑社(2002)282~283頁。

<sup>10</sup> 石渡延男・三橋広夫訳『世界の教科書シリーズ④入門韓国の歴史【新装版】—国定韓国中学校国史教科書』明石書店(1998)52頁。70~71頁。

書』<sup>11</sup>の場合、倭王（珍）が將軍号を宋に要請する記事が載せられているが、その中に「使持節・都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王」といい、宋帝が倭王に朝鮮南部の軍事統率権を与えたかのような叙述がある。これは倭王が將軍号を自称した記事で、將軍号を与えられた倭王（武）の場合は「使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王」と、百濟は入っていない。しかし、いずれにせよ倭が新羅・任那を含む朝鮮南部の軍事支配権をもっていたとすれば、教科書が語っている、先のような日朝関係の枠組みがうまく説明できないのである。

このように問題は歴史教科書をめぐって端的に表れている。そうした状況に対して方法的立場を明確にすることが求められるのである。

## 2. 本論文の立場と問題設定

本論文は、現在の国境線で区切られている韓国と日本の「国」の概念から離れ、古代東アジアの地域史<sup>12</sup>としての古代朝鮮と倭（日本）を見るべきだと考える。具体的にいえば、韓国の教科書に『宋書』『隋書』『紀』の例がないのはそうだとし、なぜ好太王碑文の任那の記事はないのか。それには教科書編纂者の（広く言えば韓国人の）意識、即ち高句麗・百濟・新羅・任那（加羅）を一国（内部）として、倭（日本）を他国（外部）としてみる意識が働いているためだと思われる。高森氏の挙げている好太王碑文の庚子年条では高句麗軍が倭から新羅を救援し、倭の逃げた「任那加羅の従拔城」を帰服させたと記してあるが、そうだとすると高句麗⇄倭・任那という対決構図をあらわにすることになり、教科書の中の世界を区分する意識に問題が生じてしまう。そのため、好太王碑文の話語っているにも関わらず、任那ははずされ、高句麗が倭だけ撃破することになるのである。

この世界を区分する意識と関わって、権五晔『廣開土大王碑文と日本の記紀神話』<sup>13</sup>では重要な指摘がなされている。氏は好太王碑文が中国の天下觀を模倣し、高句麗を天下の中心として考えていたとし、倭は高句麗の天下に参与できない（朝貢しない）圏外勢力、または征伐の対象としてしか語られていないことを明らかにした。好太王碑文に「天下」が用いら

---

<sup>11</sup> 『宋書』中華書局（1974）2395～2396頁。

<sup>12</sup> 古代東アジアの世界を地域史として見ようとする観点が近年見え始めている。濱田耕策は古代における朝鮮・日本とは区別できる社会ではないので、これらの社会を移住民の移動や地域間の関係として見るべきだと述べる。

（韓）濱田耕策「古代日韓関係の成立—地域間の交流から古代国家の関係へ」『第2期韓日歴史共同研究報告書 第1巻』韓日歴史共同研究委員会（2010）

また、田中史生は日本各地のミヤケに渡来系の人々が深く関与し、そのミヤケ支配における文字技術も韓国出土木簡から見出されるものと一致しているといいつつ、ミヤケを中心とした朝鮮と日本列島とのネットワークを想定している。

（田中史生『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』吉川弘文館（2005）170～180頁）

韓）金翰奎『天下国家』松の木（2005）6～40頁。氏によると、歴史共同体としての中国とは、中原で礼儀の文化を享有し、秦（国）・漢（国）以来の連続的統一国家を建立してきたところを意味するという。

<sup>13</sup> 韓）権五晔『廣開土大王碑文と日本の記紀神話』韓国日本学協会（2001）

れていないことから果たして中国の天下観をそのまま好太王碑文に当てはめることが可能なのかという問題は残るが、氏の研究は従来の研究が辛卯年記事に集中し、碑文全体の論理を見ようとしなかったことに警鐘を鳴らし、碑文というテキストの中で高句麗王室の正統性確立の論理を突き詰めたという点で、一読の価値があると思われる。

権五曄氏の論著で見えるように、今、ようやく古代のテキストは現在の日韓の眼差しではなく、古代のテキストとして、また一部の記事ではなく、全体の論理でテキストを見ようとする動きが出始めているといえる。本論文はこれと立場を同じくする。いわば、史実を問うのではなく、あくまでもテキストに即し、高句麗碑文の全体論理をとらえているように、『紀』の世界像全体から朝鮮記事を問おうとするのである。

古代日朝関係は『紀』だけではなく、類似した記事が『記』にも見える。すでに『記』『紀』がそれぞれの世界観<sup>14</sup>に基づいて成されたというのは神野志隆光氏の研究によって明らかになっているので、朝鮮記事についても『記』『紀』それぞれのテキストに即して見なければならぬのは当然のことであろう。しかし、今まで古代朝鮮記事を論じる際は、『記』『紀』の相違がほぼ無視され論じられてきたといえる。そのため、本論文は、『紀』の世界がいかにより『記』とは異なる世界を構築したのかを確認することからはじめたいと思う。

『記』には外国記事として「韓」「百濟」「新羅」が、『紀』にはこの外に「高麗」「任那」等の朝鮮記事と唐などの中国記事が見え、語る内容も『記』『紀』それぞれ微妙に異なっている。『紀』に外国記事が多いことについて、『記』は国際情勢について関心が薄く、『紀』は国際関係に多くの関心を払っていた<sup>15</sup>という認識に留まり、なぜ記述される国々が異なるのか、また様々な記述の相違はどこから来るのか、その疑問に答えている論著は管見のところ見当たらない。しかし、『記』『紀』の内容が異なるとしたら、それぞれが選んだ、それぞれが作り出した朝鮮の有様も異なるはずである。しかも、上記で言及したように、「三国(高句麗・百濟・新羅)の朝貢」と「任那・任那日本府」の記事は『記』には表れず、『紀』だけの話になる。

そこで、本論文は『記』との比較を通して『紀』の語ろうとする世界を明確にする。『記』『紀』から史実を求めてきた従来の研究方法ではなく、あくまでもテキストから見た『記』『紀』の世界認識の相違を探りながら、『紀』が標榜しようとする世界を、作られた「古代史」を見届けるのである。

---

<sup>14</sup> 「記紀神話論」を否定し、『記』『紀』を別個の作品としてみる視点は、氏の多くの論著に示されている(神野志隆光「神話—記紀神話をめぐって」『国文学 いまく古代』を見る(第32巻2号)』学燈社(1987)、神野志隆光・米谷匡史「古代神話のポリフォニー」『現代思想』青土社(1992)、神野志隆光『複数の「古代」』講談社(2007)。このような立場に多様なレベルの神話論も必要だと反論する飯田勇氏も「神話研究の長い歴史に学ぶならば、いかに似ていようとも『古事記』の神話と『日本書紀』のそれとは別個のテキストである、との認識は、今日誰も否定し得ない、現在私たちの共通に立つべき研究の地平ではある」と述べている(飯田勇「『古事記』の神話的世界をめぐって」『古事記研究大系4 古事記の神話』高科書店(1993))。

<sup>15</sup> 坂本義種「古代貴族の国際意識」『「古事記」と「日本書紀」の謎』学生社(1992)241～242頁。

### 3. 論文の構成

本論文は『記』とは異なる『紀』の世界を際立たせるため、『紀』にだけ存する「三韓」「任那・任那日本府」「化」というキーワードをもって三段構成で話を展開していくこととする。

まず、第一章の「三韓」についてである。高森氏の「三国朝貢」の「三国」とは高句麗・百濟・新羅を指しており、これは韓国でも一般にそのように理解されている用語である。それに対し、「三韓」とは朝鮮南部の百濟・新羅・加羅（任那）王国へと発展する前の馬韓・辰韓・弁韓を指す用語として知られている。しかし、『紀』では神功皇后の新羅征伐後、「内官家」をおいたところを「三韓」にしたといい、今までの『紀』の研究史ではこの「三韓」を「三国（高句麗・百濟・新羅）」と同一視してきたといえる。「三韓」が『紀』以前の日本資料では、まったく見えず、『紀』からはじめて使われた表現であること、しかも、元来の意味の馬韓・辰韓・弁韓ではなく、後の時代を指す用語として用いられたということからすると、『紀』における「三韓」がいかにか特異な表現なのか理解できるだろう。それに、『紀』では高麗・百濟・新羅・任那の人を「韓人」と言っているので、第一章で、「韓」の中の「三韓」を探るのは、『紀』の世界図を眺望するのに最も適切な例になるのである。

従って、第一章では「韓」から始めることとする。『記』『紀』で用いられる「韓」は漢籍の「韓」（馬韓・辰韓・弁韓）とは異なる。また、『記』『紀』の「韓」もそれぞれ異なる。『記』では明確に韓と百濟・新羅との関連性を示さないが、『紀』では後の時代の、高句麗・百濟・新羅・任那の総称として用いられ、それぞれ語る内容も、『記』とは微妙に異なる。

本論文は、まず第一節で、上代の漢籍、金石文の中の多様な「韓」の有りようを考察し、テキストそれぞれの中で生きている「韓」を確認し、なぜ『記』『紀』の「韓」を一概に見てはいけないのかその答えを見出す。第二節では『記』の「韓」を、第三節では『紀』の「韓」を見るが、『記』『紀』が類似した内容を異なる仕方で語ることが何を意味するのか、倭（日本）の世界とのかかわりの中の「韓」を探る。特に第三節では『紀』が『記』にない「三韓」という用例を持ち出して何を語ろうとしたのかを明らかにする。この第一章を通しては、世界の内外を区分しない『記』と内外を区分する『紀』の語り方を「差別」という概念を中心に探り、「三韓」をもって、『紀』がいかにか世界を区分するのか、その区分意識を確認しようとするのである。

第二章は「任那と任那日本府」についてである。「任那」も「三韓」と同様、『紀』以前の日本古代文献では見えない用例であるが、「任那日本府」は日中韓の古代文献の中にも見えない、『紀』だけの用例となる。いわば、『紀』の世界を理解するためには、この任那と任那日本府の問題は避けて通れない問題だということである。しかし、今までの研究はこれらの記事が事実か事実ではないかの問題に集中しており、『紀』が語る世界像の中でこれらを把握しようとする試みはされていない。

そこで、第二章では、なぜ『記』にない任那・任那日本府と高麗の記事を『紀』が語るのか、その疑問に答えようとする。『紀』の世界認識に基づいて任那と任那日本府の表れる所以を探るのである。

まず、第一節では古代中国、韓国の史料における「任那」の用例をさぐり、中国正史における「任那」は倭の将軍号の中でしか語られていないことを見る。また韓国の史料（好太王碑文）でも高句麗⇨倭・任那の連合を示していることから、任那は倭との関わりの中で考えるべき国であることを確認する。

次に、第二節では『紀』の任那について調べる。一般的に任那日本府の問題はよく取り上げられているが、任那自体についてはそれほど論じられてこなかったといえる。しかし、『紀』の中では任那と任那日本府とを区分しているのので、ここでも節を分けて考えることとする。この節では、崇神天皇の名を負う任那という国号、任那滅亡後の任那の調の記事の語り方などの問題を取り上げ、これらが、『紀』が任那を天皇の附庸として位置づけようとしたことから出た叙述であることを明らかにする。

第三節では、任那日本府について考える。現在、任那日本府については外交先・交易先として理解されているが、ここでは虚構の記事だとしてほぼ取り扱われてこなかった雄略紀の記事などに目を付け、任那日本府が外交先でも交易先でもなく、漢籍の中の「天府」「軍府」の機能をもつところであることを見ようとする。

次の第四節は、任那と任那日本府を中心に古代朝鮮と日本の関係をまとめる場である。ここでは、任那日本府が高麗の脅威に対して「三絞の綱」と呼ばれる日本・百済・任那の連合関係を強固にする役割（新羅に対しては救援・牽制）をもっていたことを明らかにする。

第一章・第二章を通して見ようとするのは、『紀』の世界が、『記』とは異なる外部の高麗、内部の任那を語っていることの確認である。言い換えれば、第一章が「三韓（従来説では三韓＝高句麗・百済・新羅、本論文の結論からすると三韓＝百済・新羅・任那）」と高麗を分けて考えようとする章とすれば、第二章は「三韓」の中の任那を、またその中の任那日本府を日本皇室（天皇）と関わらせて説明しようとするところだといえる。

さて、第一章・第二章は歴史研究に対する批判から出発するが、第三章は主に説話・神話研究を批判しつつ進める。この章は、『記』『紀』の新羅王子ヒボコ・意富加羅国（任那）の王子ツヌガアラシ物語研究に対する批判である。なぜ、この物語かという、この物語において『紀』の世界理念としての「化」をうかがうことができるのみならず、この物語で『記』『紀』の相違が如実に見られるからである。

『紀』の正文は単に来朝した新羅王子ヒボコが朝貢したことのみを語るが、『記』はヒボコの渡来する所以を長い紙面を割いて語る。また、『記』の新羅王子ヒボコの渡来物語と類似した物語が『紀』（一書）では意富加羅国（任那）の王子の帰化物語として示し出される。今まで主に神話・説話の側面で行われてきた『記』『紀』のヒボコ物語研究では、このような『記』『紀』の相違に注目していない。本章では、なぜ『記』『紀』のヒボコ物語が異なるありようを持つしかないのか、テキストそれぞれが作り出した世界観に基づいて答えようとする。具体的には『記』の婚姻に対して『紀』の神宝、『記』の渡来に対して『紀』の来帰（帰化）というキーワードをもって、『紀』の世界が『記』と異なっているのかを確認し、それぞれの世界観を第一節、第二節の最後の項目でまとめることにする。

以上、これらの三つの章を通して見ようとするのは、テキスト抜きで史実論議から離れて、『紀』が『記』とは違ってどのような世界を標榜し、いかに自らの世界を規定しているのかについてである。史実論争以前に行われるべきテキスト理解という一点に尽きるのである。

## 終章

一般的に、今までの古代史を見る眼差しは、今の国境に基づいて古代の国々を捉えようとしたといえる。そのような立場にたつと、日中韓の間では、今の日韓の教科書論争、歴史論争に見えるような感情的言い争いを起こしやすい。

2002年、韓国において反中感情が高まるきっかけになった中国の東北工程<sup>16</sup>もその一例であろう。このプロジェクトでは中国史の範囲を現在の中国領土内にすることで、中国東北地方の少数民族（朝鮮族を含む）の歴史が中国史となり、結果的に高句麗史（BC37年～668年）も中国史の範疇に入ることになった。これは結局、現在の国境の視点で古代を捉えるという点において、韓国の教科書が任那は内部、倭は外部の勢力として、好太王碑文を挙げながらも倭を省略して記述することと同じ立場である。

韓国内ではこれを中国の領土侵略と規定し、反中感情が高まった。この論争に対して冷静な視線を向けた学者がいなかったわけではない。例えば、金翰奎氏<sup>17</sup>はこれを「国」の概念と「歴史共同体」の概念が区別できないことから生じた無意味な論争だといい、古代の「中国（秦・漢等は国名）」、「韓国（百済・新羅等は国名）」とは国名ではなく歴史共同体（国とは違って、生活空間と文化、歴史的経験と歴史意識などを共有する共同体を指すという）であり、高句麗も百済・新羅などの「韓国」とは違って遼東にあった第三の歴史共同体（貊+濊+韓の一部）として認識すべきだと指摘している。金翰奎氏の語る「歴史共同体」の意味も、それと「国」との区分も不明確ではあるが、少なくとも金翰奎氏の指摘は、古代史を今の視点ではなく、古代のテキスト、古代の論理に基づいて捉えようとした<sup>18</sup>という面で注目すべきものであるといえる。

それでは、ここで、本論文の立場をもう一度確認しておこう。本論文は序章で言及したよ

---

<sup>16</sup> 「東北工程」：正式名称は「東北边疆歴史与現状系列研究工程」。中国内の少数民族を中華思想の下に結束させるため進められた、中国東北地方に対する研究プロジェクト。公式には2002年2月から2007年1月までで終わったプロジェクトであるが、それ以降も「白頭山工程」（白頭山は北韓に所在）という名で、白頭山を中国の領域と見なし、白頭山開発計画を進めている。

<sup>17</sup> 金翰奎『天下国家』松の木（2005）6～40頁。金翰奎氏によると中国とは、中原で礼儀の文化を享有し、秦（国）・漢（国）以来の連続的統一国家を建立してきた歴史共同体だという。

<sup>18</sup> 日本でもこのような立場に基づく論稿が発表されている。例えば、李成市「表象としての広開土王碑文」では、百済を高句麗の属民にすることや、百済・新羅を倭の臣民にすることは、あくまでも高句麗碑文の論理であり、それを事実として見なすことに危惧を表す。また、碑文中の古代の倭を何の疑いもなく今の日本と読み込み、近代のテキストとして解釈することの危険性を唱え、碑文は古代の、高句麗の論理に基づくテキストとして捕らえるべきだと述べる。

（李成市「表象としての広開土王碑文」『思想（842号）』岩波書店（1994））

うに、今の国境に基づいて古代の国々を捉えようとするのでもなく、史実を問うものでもない、あくまでも『紀』が造った「古代史」を、『紀』の世界認識に基づいて見ようとしたテキスト論であり、分析対象は『記』『紀』の朝鮮記事であった。

今まで朝鮮記事に関する研究は、概ね日本に対する朝貢国としての朝鮮諸国、天皇に対して臣属する韓人らといったぐあいに、『記』『紀』を区別せずに、また『紀』独自の三韓（百済・新羅・任那）の概念と高麗を区別せずになされてきたが、それは正当なテキスト理解だとは思えない。『紀』は至るところで高麗と他の朝鮮諸国（三韓）を区分する意識を働かせていたのである。

そこで、第一章では『記』にない「三韓」を選び、『紀』が作り出した全体の枠組み、世界区分に関わる問題を見ようとした。『紀』特有の「韓」と「三韓」の概念を際立たせるため、まず第一節では、中国正史及び金石文における「韓」と「三韓」の用例を確認し、馬韓・辰韓・弁韓を指す名称であった三韓が高麗・百済・新羅という三国を意味する三韓になった用例は、新羅の三国統一（668年）以後見える例であることを指摘した。

第二節では、『紀』の「韓」が『記』とは異なるということを示すために、『記』における「韓」を探ってみた。『記』の神代においては「韓国」をもって朝鮮南部の国々が天皇の世界に収斂すべき国であることを確認し、天皇代においては「韓鍛」と「韓人」の記事をもって「鍛冶の技術」と「養蚕の術」を持つ人々、伝来技術と伝来品を表す「韓」を打ち出しているとした。要するに、『記』における「韓」は『紀』のような否定的イメージを持つ「韓」ではなく、朝貢国、蕃国としての国でもない。『記』の「韓」は伝来技術や将来品を将来し、天皇の治下に収斂される種族として表されるのである。

第三節では、『紀』における「韓」と「三韓」の記事を考察してみた。『紀』の「韓」は古代中国の中華思想（中心の中国、周辺の蕃国）を模倣した日本流の中華的世界観（中心の日本、蕃国＝三韓・高麗、隣国＝唐）に基づいて語られている。『記』が天皇治下で一つの世界（中心＝倭、周辺＝韓）を語るのに対して、『紀』はあくまでも「朝貢国・蕃国」としての「三韓」と「高麗」を語る。『紀』の「韓」は、『記』のような文物・技術の伝来国ではなく、「日本」とは差別化されたところにある、「政治・経済」的色合いの強い蕃国なのである。

第三節では特に、『紀』の「三韓」とは、従来説かれてきた三国（高麗・百済・新羅）でも古来の馬韓・辰韓・弁韓でもなく、皇室の財政的土台たる内官家を設置したところの百済・新羅・任那を指しているということを示した。『紀』は年ごとの調が義務づけられている内官家を「三韓」と名づけ、三韓の支配が天下支配への鍵であるといい、『紀』独自の世界を語っているのである。

次の第二章では、高麗と同じく『記』にはなく『紀』にのみ表れる任那と任那日本府について探ってみた。特に、任那日本府は『紀』のみに例が見られるため、『紀』の構築した世界を探るにおいて、なぜ『紀』が任那日本府を描いているのか問う必要がある。ただ、植民地時代を正当化するため用いられた古代日本の朝鮮南部支配説に真っ先に引用されるのが『紀』の任那日本府の記事であったため、この問題は感情に基づいた研究に繋がりがやすく、そのため任那の記事は任那日本府の問題に引きずられて、任那そのものは正当に研究されて



こなかったといえる。また、任那日本府についても現在、「任那日本府＝外交を目的とした使者官人説」が主流をなしているが、この用例は欽明紀と雄略紀にしか表れず、雄略紀の高麗に対する新羅救援を除くと、主に任那再建の記事にしか出てこないにも関わらず、これをどのような性格の外交といえるか、はなはだ疑問である。

そこで、第一節ではまず、任那と諸国との関係が他のテキストにどのように表れているのか、その枠組みを見るために、中国正史や韓国の史料を探ってみた。それによると、五世紀頃は朝鮮諸国の中で高麗がもっとも強盛な国で、その次が百済であり、新羅と加羅（任那）は弱小国であったが、七世紀になると新羅が勢力を伸ばし、百済と加羅を滅亡させたということになる。また、中国正史や好太王碑文からして、強大国の高句麗と、それに対する倭・朝鮮南部の連合戦線が構築されていたと見られる。『紀』の世界もこれらと類似した内容、即ち、「強敵」として示される高麗に対して、倭・百済・任那は連盟関係にあったと語っているのである。

第二節で注目したのは、任那記事の始まり方と終わり方、語り方が他の朝鮮諸国とは異なるという点であった。任那記事の始まる崇神紀には任那が最初の朝貢国として表れ、任那王子は帰化して国に帰り、崇神天皇の名を負う国号を持つ。滅亡してからも、任那の復興会議が百済の主導で何回も行われる。任那が滅亡しても、任那の調は新羅の調・百済の調に含まれることはなく、任那の調として区分して出すよう命じられる。また、名代の廃止の記事とともに任那の調の廃止を語る。我が官家、我が百姓と呼ぶし、日本列島に徴税などの目的で派遣される国司が任那にも派遣される。それに対し、他の朝鮮諸国（三国）は次のように語られる。

最初：三国は神功皇后の新羅征伐の際に初めて表れる。

王子：高麗王子—来日×、新羅王子—朝貢使として「來帰」し、日本に留まる、  
百済王子—質、または朝貢使として来て、国に帰る。

国号：関係記事なし

滅亡：高麗—唐によって滅亡。復興について何の努力もしない。  
百済—一緒に戦い、王子と百姓をつれて日本に帰る。

調：高麗—朝貢・調の記事はあるが、年毎のものであるとはいえない。

百済・新羅—年毎の調（内官家—皇室に対する調）、  
孝徳紀に調の廃止の記事がない。

官家：高麗—官家、百済・新羅—内官家、  
三国の官家とも天皇が我が官家、我が百姓とは言わない。

国司：派遣×

任那に関する一連の記事は、『紀』が三韓を皇室の財政的土台—内官家として位置づけようとし、任那については内官家の中でも天皇の名を負い、天皇に直属し、天皇への調役を奉る国、天皇の附庸として位置づけようとしたことを示してくれる。日本府が他の朝鮮諸国ではなく、任那に設置される所以もそこに求められる。

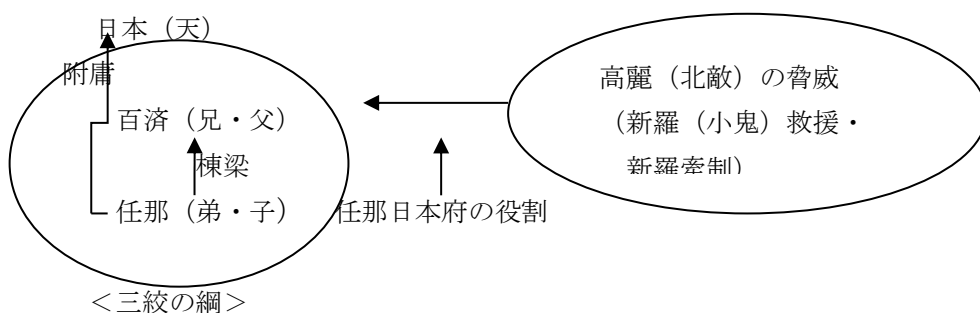
一方、第三節は任那日本府の記事を中心に、『紀』の世界像を把握しようとした節である。

まず、任那日本府を「天府」「軍部」としてとらえる。漢籍における「天府」は祖廟の宝物の保存庫、天下の産物を都に運搬する通路、諸侯を制する要塞として機能している。『紀』の任那は新羅に奪われたとはいえ、帰化した任那王子が天皇から下賜された赤絹を郡府に収めた記事があり、朝貢の通路としての多沙津が見え、高麗に対して新羅・百済の救援（百済の場合は救援が期待されている）の内容が語られる軍部としての任那日本府が見えるのである。

以上の朝鮮諸国を含んだ世界関係をまとめると次のようになる。天皇の治下を表すのが「天下」であるのに対して、唐皇帝の世界の場合は「区宇」（推古十六年八月）を用いる。他の「区宇」の例としては、「区宇一家（中略）四夷賓服」（雄略二十三年八月）があるが、この記事以前に高麗の征討記事があること、高麗が朝鮮諸国の中では「夷」と示されていることから、ここでの「区宇」とは高麗を念頭においた四夷を含む世界、「天下」より範疇の広い世界であると解釈できる<sup>19</sup>。要するに、『紀』の中では三韓<天下<区宇ということであり、『紀』は天皇の世界の広がりとしての「三韓」と、それに属しない高麗を語っているということである。

- 区宇（唐・高麗・日本などを含む全世界）
- 天下（天皇の治下）
- 三韓（皇室に対する内官家）
- 任那（天皇に対する附庸）
- 任那日本府（天府）

また、第四節では同盟関係としての日本・百済・任那、敵対関係としての新羅・高麗について述べた。『紀』では日本・百済・任那の連合を「三絞の綱」というが、これは対等の関係ではなく、垂直関係であるといえる。また、これらの三国の連合に対して、任那日本府は任那をよりどころとして、高麗の脅威から三絞の綱の連合を強固にする役割をし、状況によってどちらにもつく新羅に対しては、救援と牽制を同時にする役割をもっていたと思われる。



『記』にはなく、『紀』にのみ表れる高麗と任那・任那日本府。『紀』が高麗を外部とし

<sup>19</sup> もう一つ、神武が諸神を祭り、「区宇」を安定させたとあるが、これを神武の治下の世界として「区宇」を治めたと断定することは難しい（神武即位前紀己未年二月）

て語る以上、任那・三絞の綱・三韓という組立てでもっとも天皇と結び付けられている内部の任那と、それをより所とする任那日本府とは、ともに表れるしかないのである。

第一章・第二章は『紀』の語る世界構造について探ったが、次の第三章はその世界をいかに天皇の世界に収斂させたのか、その世界理念に関わる問題であった。古来、朝鮮諸国からの人々を帰化人と呼んだが、現在はそれが中国的世界秩序の中で表れる政治的理念だという理由で、一般に渡来人という語を使っている。しかし、『記』には海を渡ってきたという「度来」しかなく、『紀』は「帰化・投化・化來」と「来帰」を多く語っている。そこで、第三章では『紀』の世界構造を支える理念としての「化」がよく表れているヒボコ物語を選び、『紀』の中にそれがどのように組み込まれて、どのように『記』と異なる世界をつくったのかを見ようとした。

まず、第一節では、『記』のヒボコ物語が中巻の末尾の応神朝に挿入されたことの異様さについて、これは『記』の下巻の世界を神の関与の不要な新たな時代として位置づけるための装置であったと述べた。要するに、『記』は『紀』とは違って、ヒボコと在来の神（阿加流比売神）の、在来の神（春山）と渡来の神の子孫（阿伊豆志袁登比売神）の婚姻を語ることで、あるいは、海を渡ってきた人・物＋土着神の結合を示すことで、神の関与の不要な天皇の世界が完成されたことをここで示しているということである。

また、このような婚姻物語は、『記』の倭が外部からの呼び表しもなく、他の諸国ともまるで同じ言語空間の中にあるかのように語られることと無縁ではない。要するに、『記』の世界は、血縁で結ばれ、「礼」で規範付けられている氏族社会、異族を含まない世界としての「天下」を標榜しているのである。そのような世界像においてヒボコ物語は婚姻と血縁の物語として語られるしかなく、百済と新羅は異族ではなく、倭という中心の周辺にある諸国として語られることになるのである。

次の第二節では、在地の神との結合も皇室とのつながりも持たない『紀』のヒボコ物語について探ってみた。『記』が神（物）・人の渡来を言ったのに対して、『紀』は物も人も朝貢と「化」の理念に基づいて天皇の世界へと帰属していく物語である。その中に表れるのがヒボコの子孫清彦であり、『紀』は清彦をもってヒボコの朝貢物を神から天皇へ移動させる。『紀』は朝貢使としてのヒボコと、その朝貢物の帰属が神ではなく天皇にあるということを再確認するヒボコの子孫、清彦を語っているのである。

また、『紀』はヒボコの「来帰・化帰」を語るが、今まで「来帰」は「帰化」と同じ概念と見なされてきて、新羅王子の来帰と任那王子の帰化を区別せずに扱ってきたが、本章はその問題点を指摘し、「化」が『記』には存せず、『紀』の中で、神代に表れなかった異族を天皇の世界に収斂させる政治的イデオロギーとして作用したことを明らかにした。

現在、韓国における『紀』の朝鮮記事に関する論著の大半には「虚構」「歪曲」とあり、これらの文字がないものを見つけるのが難しいほどである。歴史家において史実を問うのは必要なことであり、当然の作業であるが、テキストごとに異なる世界像を見ようとせず、自分たちの主張に合うテキストとその一部だけを選び取って論を組み立てるのは、正当なテキスト理解ではなく、古代史をめぐる日韓紛争を招くだけである。今までの歴史家たちは、全

体のテキスト分析なしに安易に朝鮮記事を「記・紀」の記事として一概に説明し、しかも韓国の『三国史記』『三国遺事』などと比較して事実を探っているといっても過言ではない。もちろん、歴史的な事実は存在したはずである。しかし、このまま事実を問うては、お互いに終わりのない歴史論争、互いに対する理解のない空論を繰り返すに違いない。本論文は、テキストの中の「歴史」を究明していくことが真実の歴史を探る前に先行されるべきではないかという問題意識から出発し、その端緒を『記』とは異なる『紀』の世界に求めることで、テキストによって作り出されてきた虚構の「歴史」を確認しようとした作業であったといえる。そして、このようなテキスト分析は、同じ時期の古代を語る韓国の『三国史記』『三国遺事』や、中国正史の『史記』『漢書』などにも十分に行われるべきであろう。今、進められている東アジア共通の歴史教科書は、その次に述べるべき問題なのである。

## ■参考文献■

参考文献は出版国別（中国→韓国→日本）、年度順（現在の出版順）に並べる。韓国の出版物である場合、漢字で記入可能なところは漢字で、研究書など助辞の入っているテキストはハングルと日本語訳を併記する。また、著者『書名』出版局（出版年）の順に記す。同じシリーズのもので、出版年度が異なる場合、早い出版年度に合わせてまとめる。

### <中国出版>

#### 1. 一次資料（原文）

- 『重栞宋本 左伝注疏附校勘記』藝文印書館（1955）  
『重栞宋本 詩経注疏附校勘記』藝文印書館（1955）  
『重栞宋本 周礼注疏附校勘記』藝文印書館（1955）  
『重栞宋本 礼記注疏附校勘記』藝文印書館（1955）  
『史記』中華書局（1959）  
『三国志』中華書局（1959）  
『漢書』中華書局（1962）  
『後漢書』中華書局（1965）  
『隋書』中華書局（1973）  
『北史』中華書局（1974）  
『宋書』中華書局（1974）  
『増補六臣註文選』華正書局（1981）  
『文選』文津出版社（1987）  
『通典』中華書局（1988）  
十三経注疏整理委員会『十三経注疏 尚書正義』北京大学出版社（2000）

#### \*字書

- 『小学紺珠(地理類)』中華書局（1987）

### <韓国出版>

#### 1. 一次資料（原文及び註釈）

##### 1) 漢籍注釈書

- 国史編纂委員会編『国訳中国正史朝鮮伝』国史編纂委員会（1986）  
国史編纂委員会編『中国正史朝鮮伝 訳註（一～二）』国史編纂委員会（1987, 1988）  
池載熙・李俊寧編『周礼』自由文庫（2002）  
金谷徳編『訳註中国正史外国伝 1 史記外国伝訳註』東北亜歴史財団（2009）

- 金容徳編『訳註中国正史外国伝 3 後漢書外国伝訳註(上)』東北亜歴史財団(2009)
- 金容徳編『訳註中国正史外国伝 4 三国志・晋書外国伝訳註』東北亜歴史財団(2009)
- 鄭在貞<sup>チョンジェジョン</sup>編『訳註中国正史外国伝 5 宋書外国伝訳註』東北亜歴史財団(2010)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 6 南齊書・梁書・南史外国伝訳註』東北亜歴史財団(2010)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 7 魏書外国伝訳註』東北亜歴史財団(2010)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 8 周書・隋書外国伝訳註』東北亜歴史財団(2010)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 9 北史外国伝訳註(上)』東北亜歴史財団(2010)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 10 旧唐書外国伝訳註(下)』東北亜歴史財団(2011)
- 鄭在貞編『訳註中国正史外国伝 11 新唐書外国伝訳註(中)』東北亜歴史財団(2011)

## 2) 韓国書・韓国金文註釈書

韓国古代社会研究所『訳註 韓国古代金石文Ⅰ(高句麗・百濟・楽浪編)』

駕洛国史蹟開發研究院(1992)

韓国古代社会研究所『訳註 韓国古代金石文Ⅱ(新羅1・加耶編)』

駕洛国史蹟開發研究院(1992)

韓国古代社会研究所『訳註 韓国古代金石文Ⅲ(新羅2・渤海編)』

駕洛国史蹟開發研究院(1992)

伊汝得<sup>ユンヨドク</sup>編『訳註 三国史記(1~5)』朝銀文化社(1997~1998)

鄭求福<sup>チョンクボク</sup>、蘆重国<sup>ノジュンク</sup>ほか(外)『訳註三国史記(1~5)』韓国精神文化研究院

(1997~1998)

鄭求福<sup>チョンクボク</sup>、蘆重国<sup>ノジュンク</sup>ほか(外)『改訂増補訳註三国史記(1~5)』韓国中央研究院

(2011~2012)

姜仁求<sup>カンイング</sup>、金杜珍<sup>キムドゥジン</sup>ほか(外)『完訳三国遺事(Ⅰ~Ⅴ)』韓国精神文化研究院

(2002~2003)

## 3) 和書注釈書

金鉉球<sup>キムヒョング</sup>、禹在柄<sup>ウジェビョン</sup>、朴賢淑<sup>パクヒョンスク</sup>、李在碩<sup>イジェソク</sup>『日本書紀韓国関係記事研究(Ⅰ・Ⅱ)』一支社

(2002, 2003)

## 2. 二次資料(研究書及び雑誌書所収論文)

### 1) 研究書・研究書所収論文

- ・ 이병도(1976)『한국고대사연구』박영사(1976)
- ・ 李丙燾<sup>イビョンド</sup>『韓国古代史研究』博英社(1976)
- ・ 최재석『일본고대사연구비판』일지사(1990)

- (<sup>チエジエンソク</sup>崔在錫『日本古代史研究批判』一志社(1990))
- 사카모토요시타네·김기섭 편역「고대 동아시아의 국제관계」  
『고대한일관계사의 이해—왜』이론과 실천(1994)  
(坂元義種·<sup>キムギンソブ</sup>金起燮編訳「古代東アジアの国際関係」  
『古代韓日関係史の理解—倭』理論と実践(1994))
  - 이노우에히데오·김기섭 편역「중국문헌에 나타난 조선·한·왜에 대하여」  
『고대한일관계사의 이해—왜』이론과 실천(1994)  
(井上秀雄·<sup>キムギンソブ</sup>金起燮編訳「中国文献に表れた朝鮮・韓・倭について」  
『古代韓日関係史の理解—倭』理論と実践(1994))
  - 노성환『한일왕권신화』울산대학교 출판(1995)  
(<sup>ノソフアン</sup>魯成煥『韓日王權神話』蔚山大学校出版(1995))
  - 황패강『일본신화연구』지식산업사(1996)  
(<sup>フエンベガン</sup>黃湏江『日本神話研究』知識産業社(1996))
  - 김인배·김문배『임나신론』고려원(1995)  
(<sup>키무</sup>金인배·<sup>키무</sup>金문배『任那新論』高麗院(1995))
  - 윤석효『신편가야사』혜안(1997)  
(<sup>윤소inky</sup>尹錫曉『新編伽耶史』へ안(1997))
  - 연민수『고대한일관계사』혜안(1998)  
(<sup>윤민스</sup>延敏洙『古代韓日關係史』へ안(1998))
  - 이춘식『중화사상』교보문고(1998)  
(<sup>이춘싱</sup>李春植『中華思想』教保文庫(1998))
  - 최재석『고대한일관계와 일본서기』일지사(2001)  
(<sup>チエジエンソク</sup>崔在錫『古代韓日關係と日本書紀』一支社(2001))
  - 권오엽『광개토대왕비문과 일본의 기기신화』한국일본학협회(2001)  
(<sup>クワンオヨブ</sup>權五晔『広開土大王碑文と日本の記紀神話』韓国日本学協会(2001))
  - 야마오유키히사·정효운 역『일본고대왕권·국가·민족형성사개설』JNC(2005)  
(山尾幸久著·<sup>チョンヒョウン</sup>鄭孝雲訳『日本古代王權・国家・民族形成史概説』JNC(2005))
  - 김한규『친하국가』소나무(2005)  
(<sup>김한규</sup>金翰奎『天下国家』松の木(2005))
  - 권오엽『광개토왕비문의 세계』JNC(2007)  
(<sup>クワンオヨブ</sup>權五晔『広開土王碑文の世界』JNC(2007))
  - 노태돈「광개토왕릉비」『한국고대사연구의 새 동향』한국고대사학회,  
서경문화사(2007)
  - (<sup>ノテドン</sup>盧泰敦「広開土王陵碑」『韓国古代史研究の新動向』韓国古代史学会、  
西京文化社(2007))
  - 윤석효『국내외 사서를 통해 본 가야사 탐구』한성대학교 출판(2008)  
(<sup>윤소inky</sup>尹錫曉『国内外史書を通して見た加耶史探求』漢城大学校出版(2008))

- 사카우에야스토시·모리기미유키 「고대 동아시아 국제질서의 재편과 일한관계—7~9세기」 『제2기 한일역사공동연구 보고서 제1권』 한일역사공동연구위원회 (2010)  
(坂上康俊·森公章 「古代東アジア国際秩序の再編と日韓関係—7~9世紀—」 『第2期韓日歴史共同研究報告書 第1巻』 韓日歴史共同研究委員会 (2010) )
- 하마다코사쿠 「고대한일관계의 성립—지역간의 교류에서 고대국가의 관계로」 『제2기 한일역사공동연구 보고서 제1권』 한일역사공동연구위원회 (2010)  
(濱田耕策 「古代日韓関係の成立—地域間の交流から古代国家の関係へ—」 『第2期韓日歴史共同研究報告書 第1巻』 韓日歴史共同研究委員会 (2010) )

## 2) 雜誌所收論文

- 노태돈 「삼한에 대한 인식의 변천」 『한국사연구(38)』 한국사연구회 (1982)  
(盧泰敦 「三韓についての認識の変遷」 『韓国史研究 (38)』 韓国史研究会 (1982))
- 김동수 「「고사기」에 나타난 역사외국에 관한 고찰」 『동일어문연구(제2집)』 동덕여자대학교 (1987)  
(金東秀 「「古事記」に表れた歴史歪曲に関する考察」 『同日語文研究 (第2輯)』 同徳女子大学校 (1987) )
- 정효운 「6세기의 동아시아 정세와 임나일본부」 『인문학과 문화』 동의대학교 문화콘텐츠연구소 (2005)  
(鄭孝雲 「六世紀の東アジア情勢と任那日本府」 『人文学と文化』 東義大学校文化コンテンツ研究所 (2005) )

## <日本出版>

### 1. 一次資料 (原文及び註釈)

#### 1) 漢籍注釈書

- 服部宇之吉ほか校訂 『漢文大系 礼記』 富山房 (1898)
- 石原道博編訳 『新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝 中国正史日本伝 (1)』 岩波書店 (1951)
- 阿部吉雄・山本敏夫ほか 『新釈漢文大系 老子・莊子上』 明治書院 (1966)
- 竹内照夫注 『新釈漢文大系 礼記』 明治書院 (1971)
- 長沢規矩也解題 『和刻本正史 隋書 (一~二)』 汲古書院 (1971)
- 鎌田正 『新釈漢文大系 30~33 春秋左氏伝』 明治書院 (1971~1981)
- 高端忠彦 『新釈漢文大系 81 文選 (賦篇下)』 明治書院 (1972)
- 中島千秋 『新釈漢文大系 79 文選 (賦篇上)』 明治書院 (1977)
- 吉田賢抗 『新釈漢文大系 史記一 (本紀)』 明治書院 (1973)
- 吉田賢抗 『新釈漢文大系 史記七 (世家下)』 明治書院 (1982)
- 水沢利忠 『新釈漢文大系 史記九 (列伝二)』 明治書院 (1993)



水沢利忠『新釈漢文大系 史記十（列伝三）』明治書院（1996）  
長沢規『和刻本漢籍随筆集 第十集 百虎通』汲古書院（1974）  
井上秀雄訳注『東アジア民族史1 正史東夷伝』東洋文庫264、平凡社（1974）  
井上秀雄訳注『東アジア民族史2 正史東夷伝』東洋文庫283、平凡社（1976）  
宇野精一、平岡武夫編『全釈漢文大系 山海経・列仙伝』集英社（1975）  
大野峻編『新釈漢文大系 国語』明治書院（1975）  
竹内理三校訂『翰苑』太宰府天満宮文化研究所（1977）  
石川忠久『新釈漢文大系 詩経（上・中・下）』明治書院（1997～2000）  
吉川忠夫訓注『後漢書（第一冊～第十冊、別冊）』岩波書店（2001～2007）

## 2) 韓国書・韓国金文注釈書

武田幸男『広開土王碑原石拓本集成』東京大学出版会（1988）  
佐伯有清編『三国史記倭人伝 他六編』岩波文庫本（1988）  
金思燁『完訳三国史記』明石書店（1997）  
金思燁『完訳三国遺事』明石書店（1997）

## 3) 和書・和書注釈書

飯田武郷『日本書紀通釈（第一～第五）』秀英舎（1909）  
次田潤『古事記新講』明治書院（1924）  
秋本吉郎『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店（1958）  
三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考証（上巻）』吉川弘文館（1962）  
三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考証（下巻）』天山舎（2002）  
佐伯有清『新撰姓氏録の研究 本文編』吉川弘文館（1962）  
竹内理三『寧楽遺文（上・中・下巻）』東京堂（1962）  
坂本太郎、冢永三郎 他『日本古典文学大系 日本書紀（上・下）』岩波書店（1965, 1967）  
黒板勝美、国史大系編修会『新訂増補国史大系 令集解（前篇・後篇）』吉川弘文館（1966）  
大野晋編『本居宣長全集（第九巻～第十二巻）』筑摩書房（1968～1974）  
西郷信綱『古事記注釈（第一巻～第四巻）』平凡社（1975～1989）  
倉野憲司『古事記全註釈（第一巻～第七巻下巻篇）』三省堂（1973～1980）  
井上光貞、関晃、土田直鎮、青木和夫『日本思想大系 律令』岩波書店（1976）  
谷川士清『日本書紀通証』臨川書店（1978）  
中田祝夫編『倭名類聚抄（元和三年古活字版二十巻本）』勉誠社（1978）  
黒板勝美編『新訂増補国史大系 令義解』吉川弘文館（1979）  
青木和夫、石母田正ほか校注『日本思想大系1 古事記』岩波書店（1982）  
西宮一民『古語拾遺』岩波書店（1985）  
律令研究会編『訳註日本律令九～十一 令義解訳註篇』東京堂出版（1989～1999）  
小島憲之、木下正俊、東野治之『新編日本古典文学全集 万葉集（1～4）』小学館

(1994～1996)

小島憲之、直木孝次郎外編『新編日本古典文学全集 日本書紀(1～3)』小学館  
(1994～1998)

山口佳紀、神野志隆光『新編日本古典文学全集1 古事記』小学館(1997)

黒板勝美、国史大系編集会編『新訂増補国史大系第八巻 日本書紀私記 積日本紀日本逸史(巻十一)』吉川弘文館(1999)

歴史学研究会編『日本史史料[1]古代』岩波書店(2005)

## 2. 二次資料(研究書及び雑誌書所収論文)

### 1) 研究書・研究書所収論文

鮎貝房之進『朝鮮国名号』国書刊行会(1931)

末松保和『任那興亡史』大八洲書店(1949)

安部健夫『ハーバード・燕京・同志社東方文化講座 第六輯 中国人の天下概念一政治思想史的試論』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会(1956)

那珂通世「上世年紀考」『外交繹史』岩波書店(1958)

三品彰英「古事記と朝鮮」『古事記大成(神話民俗篇)』平凡社(1958)

井上光貞『日本国家の起源』岩波書店(1960)

平野邦雄「大化前代の社会構造」『日本歴史 古代2』岩波書店(1962)

関晃『帰化人』至文堂(1966)

佐伯有清「高句麗広開土王碑文の再検討」『続日本古代史論集(中巻)』  
吉川弘文館(1972)

石母田正『日本古代国家論(第一部)』岩波書店(1973)

神田秀夫「天之日矛」『日本神話』有精堂(1974)

請田正幸「六世紀前期の日朝関係—任那日本府を中心として」『古代朝鮮と日本』  
朝鮮史研究会(1974)

松原弘宣「古代における津の性格と機能」『古代国家の形成と展開』吉川弘文館  
(1976)

坂本義種『古代東アジアの日本と朝鮮』吉川弘文館(1978)

栗原朋信『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館(1978)

金廷鶴『百済と倭国』六興出版(1981)

渡辺公子「七支刀銘文の解釈をめぐって」『東アジア世界における日本古代史講座第3  
巻』学生社(1981)

佐伯有清『新撰姓氏録の研究(考証篇四・五・六)』吉川弘文館(1982、1983)

平岡武夫『経書の成立』創文社(1983、初出は1946)

王健群『好太王碑の研究』雄渾社(1984)

成沢光『政治のことば』平凡社(1984)

朴時亨『広開土王陵碑』そしえて(1985)

角林文雄「任那・加羅・伽耶と倭」『日本書紀研究(第二冊)』塙書房(1986)

- 佐伯有清『日本の古代国家と東アジア』雄山閣（1986）
- 倉塚曄子『古代の女』平凡社（1986）
- 神野志隆光『古事記の世界観』吉川弘文館（1986）
- 金泰定「日本書紀に表れた対韓観」『先史・古代の韓国と日本』築地書館（1988）
- 大山誠一『古代国家と大化改新』吉川弘文館（1988）
- 奈良国立博物館編『発掘された古代の在銘遺宝』奈良国立博物館（1989）
- 戸谷高明「天の下」の意味」『新展社研究叢書 25 古代文学の天と日—その思想と表現』新典社（1989）
- 石上英一「律令国家と天皇」『講座前近代の天皇』青木書店（1992）
- 坂本義種「古代貴族の国際意識」『「古事記」と「日本書紀」の謎』学生社（1992）
- 依田千百子「記紀神話と朝鮮神話」『古事記研究大系 4 古事記の神話』古事記学会編（1993）
- 飯田勇「『古事記』の神話的世界をめぐって」『古事記研究大系 4 古事記の神話』古事記学会編、高科書店（1993）
- 菅野雅雄「古事記神話に於ける「日向」の意義」『古事記研究大系 4 古事記の神話』古事記学会編、高科書店（1993）
- 堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書店（1993）
- 平野邦雄『帰化人と古代国家』吉川弘文館（1993）
- 坂本勝「応神記の構想」『古事記研究大系 3 古事記の構想』古事記学会編、高科書店（1994）
- 神野志隆光『『古事記』一天皇の世界の物語』日本放送出版協会（1995）
- 吉田孝『日本の誕生』岩波書店（1997）
- 高寛敏「アメノヒボコと難波のヒメコソ社神」『古代の日本と渡来の文化』学生社（1997）
- 遠山一郎「世界の区分」『天皇神話の形成と万葉集』塙書房（1998）
- 石渡延男・三橋広夫訳『世界の教科書シリーズ④入門韓国の歴史【新装版】一国定韓国中学校国史教科書』明石書店（1998）
- 笠井倭人『古代の日朝関係と日本書紀』吉川弘文館（2000）
- 李成市『東アジア文化圏の形成』山川出版社（2000）
- 網野善彦『日本の歴史 「日本」とは何か』講談社（2000）
- 金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』名著刊行会（2001）
- 高森明勅「韓国政府「修正要求」のお粗末」『「まとめて反論」—『新しい歴史教科書』の思想』扶桑社（2002）
- 阪下圭八「天之日矛の物語」『古事記の語り口』笠間書院（2002）
- （初出は 阪下圭八「天之日矛の物語（一）（二）『東京経済大学人文自然科学論集（65・66号）』東京経済大学人文自然科学論集編集委員会（1984））
- 田中史生『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』吉川弘文館（2005）
- 神野志隆光『「日本」とは何か』講談社（2005）
- 神野志隆光『複数の「古代」』講談社（2007）
- 武田幸男『広開土王碑墨本の研究』吉川弘文館（2009）
- 遠藤慶太「欽明紀の「建邦の神」「神宮」—『日本書紀』の百濟史—」『日本古代の

王権と社会』柴原永遠男編、塙書房（2010）

## 2) 雑誌・雑誌所収論文

- 藤原照等「古事記用字「又」と「亦」」『古事記年報（五）』古事記学会編（1958）
- 李進熙「古代朝・日関係史問題雑感」『朝鮮史研究会論文集（11号）』朝鮮史研究会（1974）
- 鈴木英夫「任那の調の起源と性格」『国史学（第119号）』国史学会（1983）
- 本位田菊士「子代と御名代と屯倉一大化前代における「公地・公民」の概念と実態一」『日本史研究』日本史研究会（1985）
- 田中卓「神功皇后の実在論」『悠久（21）』桜楓社（1985）
- 神野志隆光「神話—記紀神話をめぐって」『国文学 いま＜古代＞を見る（第32巻2号）』学燈社（1987）
- 坂田隆「三韓に関する一考察」『東アジアの古代文化（59号）』大和書房（1989）
- 松本直樹「「天下」の構造と意味」『国文学研究』早稲田大学国文学会（1989）
- 神野志隆光・米谷匡史「古代神話のポリフォニー」『現代思想』青土社（1992）
- 徐建新「北京に現存する好太王碑原石拓本の調査と研究—王少葳旧蔵本と北京図書館蔵本を中心として—」『史学雑誌（103-12）』史学会（1994）
- 李成市「表象としての広開土王碑文」『思想（842号）』岩波書店（1994）
- 鈴木靖民「古代日朝関係史の虚実・偶感」『日本歴史（第600号）』吉川弘文館（1998）
- 岡田敏樹「日本と韓国の歴史教科書共同研究の試み」『別冊世界 歴史教科書問題 未来への解答（第696号）』岩波書店（2001）
- 李鎔賢「任那と日本府の問題」『東アジアの古代文化（110号）』大和書房（2002）
- 李永植「任那日本府」を通じてみた六世紀の加耶と倭」『東アジアの古代文化（110号）』大和書房（2002）
- 前川春美「「秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫」物語の意義」『古事記年報（四十七）』古事記学会（2004）
- 谷 和樹「みやげ」—『古事記』における制度として—『国語と国文学（第千五号）』東京大学国語国文学会（2007）
- 重松敏彦「大宰府の成立過程—その対外的機能の展開を中心として—」『考古学ジャーナル7（588）』ニューサイエンス社（2009）
- 君島和彦「韓国での教科書研究—ソウルで考えたこと 第六回—」『歴史評論』校倉書房（2013）